

# 吸入療法における薬剤師の関わり



吸入指導の様子

現在、喘息・COPD（慢性閉塞性肺疾患）の治療において吸入療法が中心となっています。一般的に使用されている内服薬は、腸から吸収されて血液を介し全身にまわるため、副作用も起こりやすくなります。しかし、吸入薬は気道に直接薬を届けるため、内服よりも少量で効果を発揮し、副作用も少なくすることができます。長期的な治療が必要となるこれらの疾患において、吸入療法は比較的安全に使用することが可能となります。

吸入薬には大きく分けてエアゾール・ドライパウダー・ミストと3種類の製剤があります。さらに、それらを吸入するためのデバイス（器具）は製薬会社によってさ

まざまな形のものが存在し、患者さんによっては、使い方の異なる吸入薬を複数使用することも珍しくありません。最近では、1つのデバイスの中に2種類の成分が配合された吸入薬も増えてきており、少しずつ患者さんの負担を減らすような工夫がされてきています。

吸入療法は、正しい吸入方法で医師の指示通りに継続使用することが、治療の第一歩となります。しかし、内服薬は抵抗なく服用できても、吸入薬となると「難しい」、「面倒くさい」など、最初から拒否感を示されたり、中断されてしまうこともしばしばです。

私たち薬剤師は、吸入薬を使用するすべての患者さんに吸入支援を行っています。それにより、その場で実際に患者さんと一緒に練習をすることで、複数ある吸入薬からより適切なデバイスを提案することができています。また、吸入薬だけでなく、疾患への理解を促すことで、アドヒアランス（患者さんの治療への積極参加）向上を図り、不安なく継続していただける

薬剤部 調剤課・医薬品管理課  
課長 黒星 美奈



よう取り組んでいます。

当院では20年近く吸入支援を行ってきておりますが、薬剤師の関与が始まった当初に比べると、格段に吸入薬のアドヒアランスは向上しました。しかし、まだまだ、継続という面では問題点が多いのも事実です。吸入支援の更なるステップアップを目指すため、今年度は支援方法の大幅な見直しも行っています。

その一つとして、「独立行政法人環境再生保全機構」より提供されているDVD等の資料をもとに、吸入時の口のあけ方を変更しました。口を「ホー」という形であけるようにすることで、舌を下げて吸入を行うことができ、よりダイレクトに咽頭から薬が入るような方法にしました。それによって、今までより、薬の効果が得られ、口腔内の副作用も軽減できると思われま。また、定期的なフォローを行うような体制を作り、患者さんに適した、より良い治療環境を提供していきたいと考えています。

## 带状疱疹の診断の補助に

皮膚科 部長 野間 陽子  
細菌検査室 笹田 和美

### 带状疱疹について

带状疱疹は6~7人に1人が生涯に罹患するといわれ、原因はヘルペスウイルスの中の水痘・带状疱疹ウイルス（VZV）によるものです。初感染は水痘（みずぼうそう）であり、主に小児期にかかったウイルスが神経節に潜伏感染します。潜伏期には無症状ですが、疲労、ストレス、悪性腫瘍や基礎疾患による免疫力の低下、手術、放射線、外傷等が引き金となり再活性化します。

神経節で再活性化したウイルスがその神経支配領域にまず前駆痛を起こします。片側性に強い痛みがおこるため、頭であれば脳神経外科、胸腹部であれば内科、四肢であれば整形外科など、痛みがある部位の科によく受診されています。

そのウイルスが遅れて知覚神経を通じて約1週間後に表皮に達することで紅斑~水疱が出現し、初めて带状疱疹の診断がつきます。典型的な帯状の皮疹であれば視診で診断可能ですが、初期で皮膚症

状が軽く、帯状分布でない、水疱がはっきりしないなどの理由で診断に迷う場合もあります。

带状疱疹の問題点の一つは急性期疼痛も強いのですが、带状疱疹後神経痛として慢性に続く痛みが残ることです。そのため、発症から72時間以内に抗ウイルス剤の投与を開始することが望ましいとされているため、早期診断が望まれます。

皮膚科に受診することができれば、水疱内容からウイルス感染細胞をギムザ染色で確認（ツァンクテスト）することができますが、当院では救急や専門医がいない場合でも検査ができるキット（デルマクイック）を導入しました。

注意しなくてはいけないのは単純疱疹（HSV1.2）も同じ水疱、紅斑が見られることです。単純疱疹と带状疱疹の治療は同じ抗ウイルス剤でも適応や投与量が違いますので、VZVの検査であるデルマクイックは診断の助けになると考えられます。



水痘・带状疱疹ウイルス抗原検査キット

### 水痘・带状疱疹ウイルス抗原検査（デルマクイックVZV）について

この検査は、イムノクロマト法（インフルエンザ等の迅速検査と同じ）を測定原理とした診断キットで行います。皮疹の内容物、または、びらん・潰瘍ぬぐい液を検体とし、特別な機械は必要とせず、10分程度で簡単にウイルス抗原を検出することができます。皮膚科医でなくても、带状疱疹の補助診断として、救急や時間外などに各診療科から検査室へオーダーしてみてください。